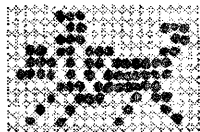


『ゴッホ』 小川国夫 著

平凡社



藤本 美穂子

「彼はたしかに幼い頃から絵を描くのが好きだった。まだ十才になるかならないかで描いたという頭をひくくさげて、前足をふんばり後足の筋も目立つほどに土をけつてうなる犬の絵など、並でない力を感じさせる。

貧しい牧師の息子ではあったけれど、父親から神に対する誠実さだけは、身にあまるほどに受けつぎ、かえってそれが晩年に至る狂気の世界に身を沈める動機になっているといえるかもしれない。

若くして家計を助けなければならない状況が彼を必然的に絵の世界に導き、画商になろうと絵に接する。けれども彼は貧しい炭坑の町の教師として、身も心も寒々とした人々にささげようと努力する。彼のひたむきな情熱を貧しい町は理解することができず、最後に、はじめから愛し続けていた絵の世界に自分をかける。

郵便配達夫を描き、浮世絵に魅せられ、ひまわりを描き、春先きのアルルを描く。

そんな中に『はね橋』の絵がある。それは黄色くて明るい。

何年もの風に、雨に耐え続け、今はね上る必要もなく静かにひっそりとそれは存り続ける。その下を船が激しく行き交った当時の、はなやかさをしのぶものはやなく、ただはね橋の鉄線の強さが物語る唯一のものかもしれない。

風が通りぬけると、はね橋はどうかしたはずみに、泣くような音をたてるかもしれない。真夏の、あまりにも明るい太陽のもとで、このはね橋は、何

をうったえようとするのだろうか。彼はこの対象に何を
見たのだろうか。なすべきことを全てしおわった安らぎを
彼はこの橋に見いだしたのだろうか。

彼はこよなくはね橋に心をよせていたという。」

これは私が所属しております、「伸びる児童文化研究
会」で創作の勉強の折、指導者から「ふしぎな橋」とい
う題を出され二十分程でまとめたものです。「ふしぎな
橋」というイメージが、なぜゴッホの「はね橋」の絵に
重なったのか、よくわからないのですが一気に書いたこ
とを思い出します。

私はゴッホに魅かれます。映画や演劇や画集や書物な
どで、随分なじみ深いのですが、この『ゴッホ』（小川
国夫著 平凡社）がことのほか好きです。この本によっ
て、さまざまな喜びを得ることができました。

表紙はうす茶のくすんだ布張りで、ヴィンセントとか
た押しの文字が、ななめに走っています。見かえしはゴ
ッホの木のデッサンです。本の文字は茶色であたたかさ
が感じられます。内容は、小川氏がゴッホが生きて歩い

た町々を、ゴッホの時間にそって訪ね、その町の印象、
絵のこと、ゴッホの精神性について語られているもので
す。もちろんゴッホがしたためたあの手紙も軸になって
います。

小川氏の語る言葉は、短かく鋭く、それでいてゴッホ
をこよなく愛するあたたかさに満ちています。

話は生れ故郷であるズンデルトからはじまります。

ザッキンの肩をよせあう、憂いに満ちたゴッホとテオ
の銅像の紹介——葉の写真——に続いて弟テオとのまれな
兄弟愛について語られます。私はこのザッサンの像を見
ているだけでこみあげてくるものを感じるのです。

「……ゴッホの死んだ兄の墓はどこにあるのだろうか。

彼の兄は彼より丁度一年前、同じ日に死児となって生ま
れ、ヴィンセントと名づけられた。名前も彼と同じだっ
たわけだ。で弟ヴィンセントは兄ヴィンセントの墓を見
ながら育った。少なくとも毎日曜日はここに来た。幼年
ゴッホはどう思っていたろうか。やがて彼にも弟ができ
るヘテオの誕生は無意識ながら彼をその負い目から救い
出したのかもしれない。その誕生をうれしく感じて、こ
れが二人の間の友情の基礎となったのかもしれない。」

う彼の甥のゴッホは書いている。まねな兄弟愛の源にはこうした事情があった。……すでに死んでいた兄が地下からそれを強める役を果たした。」小川氏はこう語っています。

ゴッホを想うとき、弟テオのことをぬきにしては語れないということには気づいていましたが、死者がそれにより強めていたという言葉は、新鮮な驚きと共に私に迫ってきます。ゴッホは自己に目覚めはじめるその時に、死を意識しなければならなかったということについて――

ズンデルトの章ではこの他、ゴッホの中に故郷がどんなに大きな力をもっていたか、肉親の愛情、最後のテーマになった麦畑のことなどが語られます。そして後はゴッホがたずねた町がそれぞれの章になり、その町の名の下に副題がつけられています。

たとえば、ハーグ 交信の約束、ロンドン 初恋、エッテンハーグ 閃光のように、パリ 乱反射、サンレミ 牢獄の豊饒、オーヴェール 人を強めるもの、というように。

小さな副題を見ていくだけで、その時ゴッホの心で何

が起ったのかを想像することができます。前記しましたがゴッホが弟テオとのまねな兄弟愛で結びついていたということも、小川氏の言葉はある深さをもって私を納得させます。絵と同じほどに自分をかけたテオへの手紙、そのきっかけになった言葉を小川氏は二伸目に見い出します。そしてそれに続く言葉が心へのこります。

『僕はとても喜んでゐる。これからはお前と同じ仕事を、しかも同じ商会の社員としてやれるんだね。これから僕たちはお互に、たくさんの手紙をやりとりする必要ができてくるんだ。』……それほどゴッホの〈土〉は良かったのだ。私が今〈土〉と称んでいるものは彼に深く喰いこんでいた故郷、或は肉親ということだ。更にいい変えるなら、彼の無意識の時代といってもいいだろう。そこは人間らしい優しさと活力がみなぎる沃野であった。だが、この野に下ろした木は、育つべき召命があったがために、苦しまなければならなかった。輝かしいと同時に無惨な試練が待ち構えていたのだ。』

小川氏がゴッホを従う人としてとらえている、そのことに私はとても共感します。私自身、生を「使われて在る」という以外のとらえ方ができないのです。ゴッホと

は比較の対象ではありませんが、人間の生をどのような視点でながめるかということで、私は小川氏のまなざしに信頼をおくのです。

最後に死のことについてふれたいと思います。この本の中で、ゴッホにとって伝道も手紙も絵も等しなみに大きいとのべられています。彼に宗教への関心がなかった筈はなく、視点は一点にむかっていた筈です。にもかかわらず自ら死を望んだということが、ゴッホに魅かれた理由の一つでした。小川氏の力をかりながら、このことを考え続けていますと、少しわかる気がします。ゴッホにとって宗教的な願望は絵を描くことと等しいのです。絵を描き続けることが生きていることの証しだったのです。だから絵が描けなくなるというおそれは、同時に宗教的な願望を絶つことであり、生そのものの意味を失くすることだったのです。ゴッホにとって絵を描くことが全てだったのです。ゴッホの「麦畑」、「ドービニーの庭」、「はね橋」みんな好きです。これらの絵はたしかに「人を強める」絵にちがいありません。どこに、何故そんな力があるのか、私はもっとわかりたいと願います。

ゴッホの死と生は個人的なものではなく、普遍性をもって私に関わってきます。あまりにも明白な限界としての死を見つめることなしには、生は考えられないからです。そして死の瞬間にはそれほどの意味はなく、どのように生きたかが問われるべきだと思います。しかし、ゴッホは引き金をひく瞬間、平安であったのだろうか、それとも……。

(大阪市・長居幼稚園)

